

IBM i を担う 次世代

田村洋一郎氏

株式会社ミガロ、
システム事業部システム1課
主任



よいシステムを構築するための 方程式が見えてきた 業務知識×信頼×仕事を楽しむ

IBM iの世界は高齢者ばかりではないかという風評がある。しかし、iMagazineの調査(特集2)を見れば、30代以下が半数を超える。若い世代がもっと見えてきていい。そんな思いで企画を立てた。トップバッターには、一昨年、ミガロで「社長賞」を受賞した田村洋一郎氏にご登場を願った。

入社4年目の田村洋一郎氏は、今、メインフレームからIBM iへ移行するユーザーの基幹システムにかかりつきりである。というのも、開発スケジュールが非常にタイトになっているからだ。

現在は、内部設計と開発が並行して進行中である。田村氏は、仕様書の作成と進捗管理の担当なので、仕様書を書いて10名程度の開発者に仕事を割り振り、開発の進捗を見ながら、次の仕様書を作成するという仕事の進め方をしている。

進捗管理の担当は2度目となる。初めて担当した時は、周りにたくさんのフォローをもらいながらの担当であったが、今回はメインの担当としてきめ細かな目配りが要求されている。

開発の予実管理を行えるALM (Application Lifecycle Manegemet) ツールを導入しているので、サーバーに上げられたプログラムを見れば、どういう進捗状況かを確認できます。それを基に、しつこいくらいスピードアップを促したり様子を聞いたりしていますが、それでもスケジュール通りにすんなりとはいきません。遅れが発生しそうならできるだけ早く

報告してもらい、調整可能な人に振っていくことを心がけています。進捗管理という仕事は奥が深いなと思いますね。

田村氏は今回初めて、構築するシステムの業務フローの作成を担当した。以前のプロジェクトで「業務知識を身につけることの大切さと重要性が身に染みて分かった」ので、今回はこれまで以上に気合を入れて知識を蓄え、「業務フローを作らせてください」と手を挙げた。

リスクを考えたら、ベテランが業務フローを作ったほうが絶対にいいに決まっています。でも、OKが出たので燃えました。正直なところ、以前のプロジェクトでは、業務知識・業界知識を勉強していてもお客様との話の流れについていけないこともありましたが、今回は、ご担当者と突っ込んだ話ができ、非常に充実感を覚えました。お客様との会話が変わったなということが自覚できて、とてもうれしかったですね。

直前のプロジェクトでは、もう1つ、強く印象に残る経験をした。完成度の

高いシステムを開発する上での「信頼ということの重要性」だという。

前回のプロジェクトは、ものすごくうまくいきました。それはなぜかと考えると、お客様とプロジェクトの責任者だった上司との信頼関係がとても強かったからなんですね。お客様のちょっとした質問にも丁寧にお答えする。不明点があると、納得していただくまでご説明する。そういうことの積み重ねで信頼関係が構築されていると、同じような仕様のシステムでも完成度はまるで違ってくるのだと思います。

田村氏のミガロ.に入社した動機が面白い。

学生時代に社会人に対して持っていたイメージが、「疲れている」とか「ダサイ」だったんです。就職活動で面接を受けた会社の担当者の方々も、そんなイメージを払拭してくれる人は少なかった気がします。しかし、ミガロ.の社長だけは楽しそうに仕事をしている雰囲気があってカッコいいと思い、憧れました。ここなら「疲

